

ぐんま昆虫の森におけるオオムラサキ越冬幼虫調査

金杉隆雄（群馬県立ぐんま昆虫の森）

キーワード：ぐんま昆虫の森、オオムラサキ、ゴマダラチョウ、越冬幼虫調査

はじめに

ぐんま昆虫の森は、桐生市新里町にある里山環境を再現した施設である。昆虫の森では、開園前の2002年（平成14年）に昆虫調査隊として園内のオオムラサキ越冬幼虫の調査を開始した。その後、2005年（平成17年）からはぐんま昆虫の森友の会行事として継続して調査を行っている。本報告では2002年から2014年までのオオムラサキ越冬幼虫調査の結果を報告する。

調査方法

オオムラサキ越冬幼虫調査は、毎年11月下旬～12月中旬頃にぐんま昆虫の森園内の雑木林ゾーンにおいて実施している。調査を行うエノキは基本的に毎年同じ樹木を選定しているが、調査した本数は年によって32本から49本と違いがあった。これは本調査が親子向けの自然観察プログラムの一環として実施しているため、調査時間に制限があることによる。

調査はエノキの根元の30～50 cm程度範囲の落ち葉をめくって幼虫を探し、見つかった幼虫を水切りネットに回収し、一本の樹木の調査が終了した時点で幼虫の種類と個体数を確認した後、幼虫は根元に戻すという方法で行った。尚、2012年は天候不良のため調査中止となり、データが得られていない。



図1 調査の様子

調査結果

確認された幼虫の個体数は、オオムラサキでは558個体（2005年）から53個体（2014年）と年によって変動が大きかった。2002年から2006年までは少ない年と多い年を交互に繰り返していたが、2007年から2011年までは500個体前後で安定していた。しかし、2013年以降は激減している。

ゴマダラチョウでは129個体（2008年）から14個体（2014年）と確認された個体数はオオムラサキに比べて少ないが、個体数の年変動はオオムラサキと同様な傾向が見られる。

アカボシゴマダラは、朝鮮半島から中国大陸に分布しているチョウであり、国内では奄美大島のみに大陸産とは別亜種が生息している。1990年代後半～2000年代前半に大陸産亜種が国内に持ち込まれ、埼玉県及び神奈川県で人為的に放チョウされと言わ

れており、近年、分布を拡げている外来種である。群馬県内では2010年の6月に高崎市吉井町牛伏山で成虫が確認されたのが初記録であり、同年7月にはぐんま昆虫の森でも成虫が確認された。越冬幼虫は2011年の調査において初確認された。その後は調査を行わなかった2012年を除いて2013年、2014年と確認されているが、これまでのところ個体数の大幅な増加はみられない。

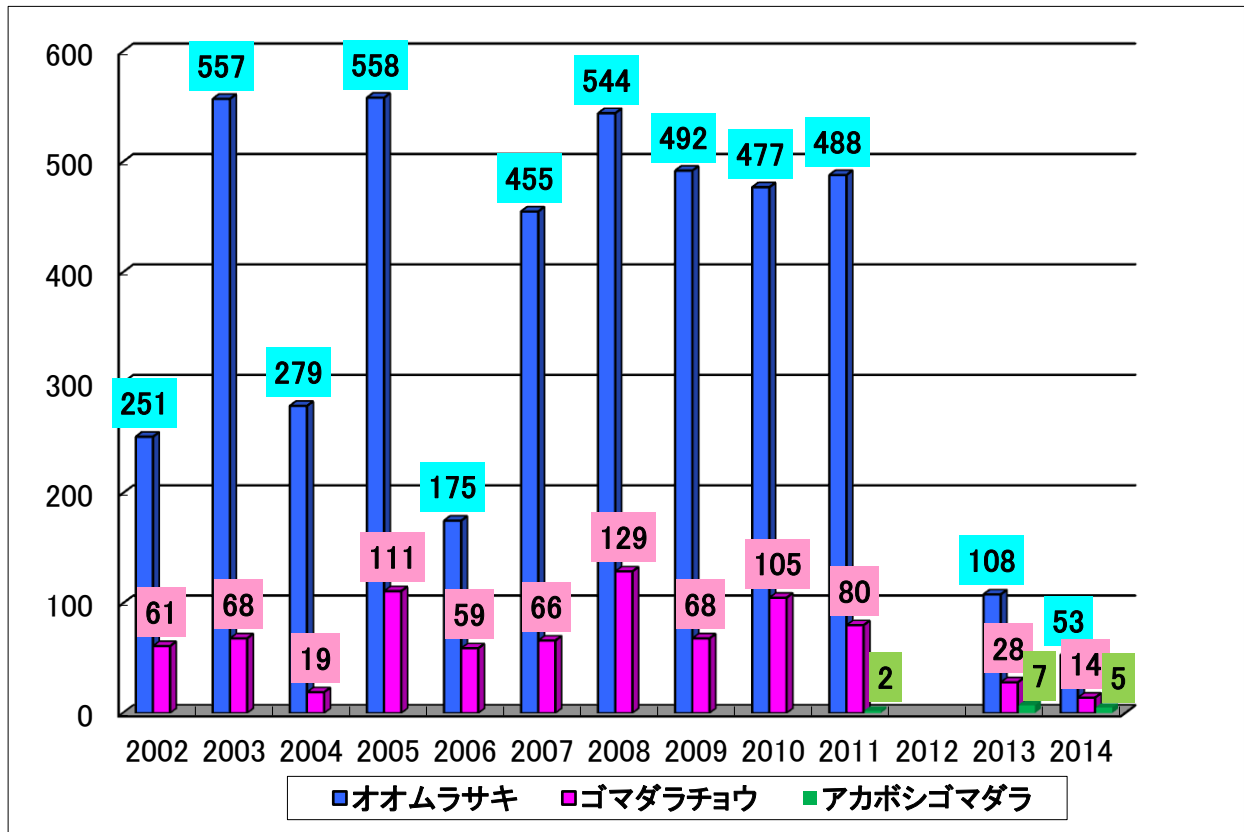


図2 調査によって確認された幼虫個体数の推移



図3 オオムラサキの越冬幼虫



図4 ゴマダラチョウの越冬幼虫



図5 アカボシゴマダラの越冬幼虫